

# 子どもの自立を育む音楽科の学習

## —生活科・総合的な学習との関連を生かした実践—

福田 秀 範

### 1. 生活科・総合的な学習との関わりを生かす

本校では、現在3年生以上から総合的な学習を「人間」「環境」「自分タイム」「コンピュータ活用」の4領域を設定し、研究実践を行っている。低学年では、総合的な学習を生活科の発展ととらえ、生活科の学習内容に組み入れ、同様に研究を行っている。

音楽科が、本校で進められている総合的な学習にどういった関わりができるかを現在模索中であることは、音楽科の考え方で述べたとおりである。私は、本校の研究テーマ「自立に向かう子どもたち」でめざす子ども像の実現に向けて、音楽科で育てる力と音楽科から発展していく力を明らかにしたいと考える。つまり、音楽科で自分の感じた思いを音や音楽で伝えられる表現力を身につけ、その表現力を生かして、いろいろな学習の場で発揮できる力である。そういう機会を設定するには、自らの直接体験で感じた思いを自分なりの課題設定から表現・まとめまで行い、次の課題へつなげていく生活科・総合的な学習の基本的な学習の流れとの関連が非常に重要と考えた。そこで、昨年度の「環境」領域との関連を図った第2学年の実践「音でつたえよう～これが元字品だ～」<sup>1)</sup>の実践の成果と課題を踏まえ、サブテーマ「自分で決める場を大切に」を更に明確にしていくことで、なにが音楽科で育てる力でそれが他教科・他領域にどう発展していくのか、その可能性を探っていききたい。

### 2. 自立を育む授業づくりで大切にすること

授業をつくっていくポイントと次の4つの場を大切にすること。

- ①自分の思いを深める場の設定（課題設定）
- ②自分の思いを伝えるための表現方法を自分で決める場の設定（計画）
- ③表現し合い、聴き合う場の設定（表現・鑑賞）
- ④新たな表現に意欲をもつ場の設定（ふりかえり・新たな課題設定）

### 3. 実践の概要 「音や劇で伝えよう～えんこう川って・・・～」(第1学年)

<音楽科と生活科との関連を図った題材>

#### (1)題材について

「えんこう川」は、子どもたちが生活科の自然体験学習で訪れる場所で、校区を流れる太田川の支流である。たくさんのカニ、ヤドカリ、シャコなど、子どもたちの興味・関心を喚起する生き物が住んでいる。そこはまた、泥やゴミの宝庫でもあり、足場が悪く、1回の活動で靴や服がドロドロに汚れてしまうほどである。本題材は、生活科で実際にえんこう川で体験して感じた自然への親しみや感動を生かし、そこで聞こえた音やイメージした音を手がかりにして、子どもたちが身近な音素材を使って音や劇でえんこう川の様子を表現することをねらいにしている。この学習を通して、身近な自然に存在する価値ある音に気づくとともに、自分の音楽観を広げていけるきっかけにしていきたい。

本学級の児童は、前期に「1の2のさんぽ」という題材を通して、生活科でのいも畑や猿猴川での体験を歌詞に盛り込み、替え歌を歌ったり、音をつくったりする活動を行っている。(音づくり

には図工科「すてきな音の出るマラカスづくり」との関連を図った。) その際、子どもたちは、川に住む生き物の音や泥を歩くときの音など様々な音を表現することができた。ただし、それらの音が「猿猴川の音」「いも畑の音」として、一つ一つの音のよさを感じとる場までには至らなかった。今回は、子どもたちの見つけた音に歌や劇表現を加え、一人一人の個性的な表現が生きる総合的な表現づくりができるように支援の在り方を工夫していきたい。

## (2)指導目標

- ①えんこう川での思い出を、自分の見つけた音や歌や劇を通して、楽しく表現することができるようにする。
- ②身近な音の様々な表情を感じとり、価値あるものととらえ、音楽観を広げることができるようにする。

## (3)指導内容と計画…………… 8 時間 (+生活科 8 時間)

- 第一次 えんこう川をしょうかいしたいな…………… 1 時間
- 第二次 どんな場面をしょうかいしようかな…………… 2 時間
- 第三次 場面ごとにくふうしよう…………… 4 時間
- 第四次 ついに完成「えんこう川って たのしいな」… 1 時間

## (4)学習活動の実際

児童の実態に述べたように本実践に入る前の子どもたちは、自分の思いを音でつたえる経験を行っている。生活科での雑草を抜くのに必死になったいも畑での体験や初めてのえんこう川で泥だらけになった体験が表現への意欲となり、自分なりの音素材を自分で見つけ、自分なり表現方法を工夫し、お互いの音を聴き

(資料1)「いも畑とえんこう川の音探し」の実践 主な子どもの表現

表現したい音や様子	選んだ音素材	表現方法
草むらを歩く音	タフロープ	数本を束ねてくくったものを、手に持ち振る。
砂を踏みしめる音	砂、木の枝、紙容器	紙容器に砂を入れ、木の枝を差し込む。
バツタのはねる音	プラスチックの定規	両手で定規を持ち、指でしならせ弾く。
川の水の音	紙箱、砂	紙箱に砂を入れ、両手で揺らす。
泥にはまって歩く音	ペットボトル、泥	ペットボトルに砂と水を入れ、振る。

合ったのである。これは、授業づくりのポイント①②③を意図した音楽科の取り組みである。その時の子どもたちの表現した音や様子、選んだ音素材とその表現方法について、主なものは(資料1)に示すとおりである。以下の実践は、これらの経験をさらに生かしていく授業として、ポイント④を特に意図したものである。

### 【第一次 えんこう川をしょうかいしたいな】

ここでは、生活科で2回出かけた「えんこう川たんけんたい」での直接体験から得た様々な自分の思いをまず話し合った。(この実際の体験活動の様子については、初等教育76号をご参照いただきたい。) 子どもたちは、この体験活動(探検)を通して実に様々な感じとりをしている。子どもたちみんなが感じたこと、それは「たのしい」である。「えんこう川って・・・」で始まった本題材名は、子どもたちの思いから「えんこう川って たのしいな」と決定した。これは同時に子どもたちが表現をつくっていくテーマでもある。子どもたちがえんこう川で感じた主な思いは、次に示す通りである。

この感じたことをどうすればえんこう川に行ったことのない他の人に伝えられるだろうか、子どもたちの課題設定の場である。まず、子どもたちには自分が一番伝えたいことを自分で決める場を設定した。ここでは、一人ひとりのたのしかった体験が強く心に残っているだけに、ほとんどの子どもが自己決定できた。ここでは自然との直接体験が大きな支援となったといえる。伝えたいことは決められたものの、どうやってそれを人に伝えるか、これが次の課題になった。生活科ではここから、絵や絵日記、粘土など自分なりの表現を工夫していった<sup>2)</sup>。しかし、文を書いたり、絵をかいたりするだけが表現だけではない。音楽的な表現もある。ただ経験が乏しいだけに、子どもたちに表現方法として選ばれなかっただけである。今回の題材設定にはそのような現状を踏まえ、「音や劇で」という言葉で伝える方法を絞り、音楽科の学習内容として価値を高め、音楽表現の可能性に子どもたちが気づく場としたい意図が込められている。音楽表現が加わることで、生活科では出せなかった新たな表現に取り組む場としていきたいと考えたのが本実践である。

子どもたちは、自分の伝えたいことと同じような考えの子ども同士でいくつかのグループにわかれ、それぞれのグループごとで、伝えたい様子をさらに具体的に話し合うことになった。

【第二次 どんな場面をしようかしようかな】

子どもたちの思いから自発的にできたのは次の6つのグループであるそれぞれのグループごとで、どんな場面を音や劇で紹介するかを話し合った。その結果を右に示す。ここでも、子どもたちが自分たちでストーリーや配役、必要になる音を決めていった。ここでの教師の支援は、ワークシートを用意したことである。子どもたちは、これをもとに見通しをもって話し合いを始め、速いグループは、即練習に取りかかることができた。

(資料3) どんな場面を紹介しようかな

グループ名	表現したい様子	出てくるおもな音
へいわ	たくさんのカニがえんこう川で遊んでいる	カニのゆっくり歩く音
ピンチ	人が来て、穴に隠れてしまったカニたち	カニが急いで歩く音
いきものゲット	生き物をたくさんつかまえた子どもたち	泥にうまって歩く音
かんかんおもちゃ	えんこう川で見つけたたくさんゴミ	動くおもちゃの音
こけてはまっておたすけ	泥にはまってピンチの連続の子どもたち	どろにはまる音
えんこう川の水	静かなところに急に波が襲いかかった	波の音

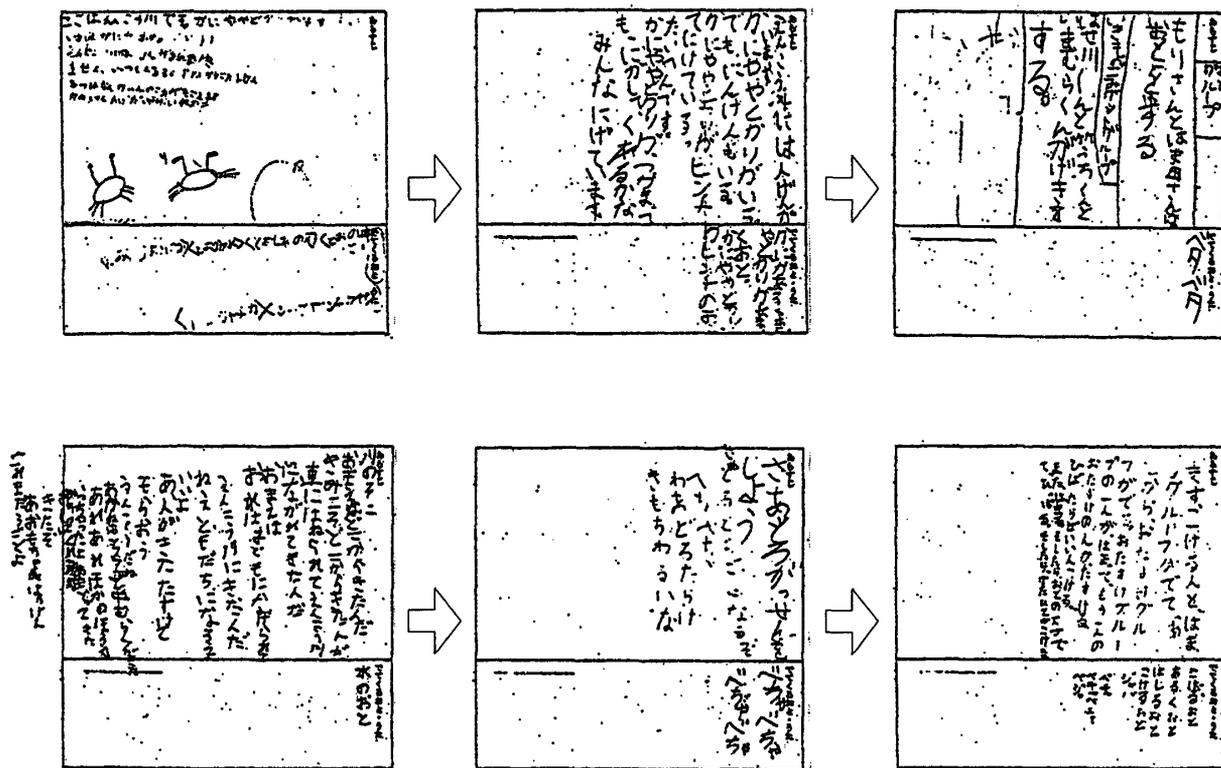
【第三次 場面ごとにくふうしよう】

第二次で決定した計画をもとに、それぞれが実際の練習に取りかかった。その際に、劇についてはセリフや動きが、音についてはどんな音素材をどのように生かすかが表現決定への追究活動になった。ここでは、各場面ごとの練習経過を見合う場も設ける支援を行い、お互いの表現のプラスになるアドバイスをお互いがし合う場にしていった。自分たちの練習の過程で、どうしても他のグ

(資料2) えんこう川で感じたこと

- 貝殻やかにやえびをたくさん見つけて、楽しかった。
- 川の水に入ったら、冷たくて気持ちよかった。
- やどかりをたくさんつかまえられてうれしかった。
- 泥にはまって、ぐにゃっとしたのが気持ちよかった。
- 大きくて汚かったけど、生き物がいっぱいいてびっくりしたよ。
- カニをつかまえて、逃がそうと思ったけど、お母さんに見せたくて持って帰ったよ。
- カニをつる仕掛けをつくったけど、全然役に立たなくて残念だった。
- ドロドロで歩きにくかった。
- ぼくが一番大きいカニを見つけたので、すごくうれしかった。
- カニをつかまえようとしたけど、こわくてにがした。
- 帰る頃に、潮が満ちて、みんなの足あとが水にのまれてびっくりした。
- どろんこになったけど、とても楽しかった。また行きたいです。
- 何もつかまえられなくて、くやしかった。
- こけのついた石やこわれた電話が落ちていた。
- 今度休みのときに、家族で来てみたいな。

ループの手助けが必要であるというグループがいくつか表れた。例えば、ピンチグループは自分たちがカニやヤドカリになって逃げたり隠れたりする様子をやってみても、追いかけてくる子どもがいない。逆に、生きものゲットグループは泥にはまって歩きにくい動作はあるものの、肝心の捕まえる生き物はいない。お互いにないものを求め合う気持ちが一つになり、2グループが生き物ゲットとして、一つの大きなグループへとまとまっていったようにである。こうして、最終的に4つのグループができ、それぞれであらすじと音を考え、一つにつなげたのが次の作品である。



#### 【第四次 ついに完成「えんこう川って たのしいな」】

こうして、完成したあらすじをもとに、子どもたちは音や劇で自分たちの発表を仕上げた。発表の日は研究会当日である。誰かに伝えるという意識を他府県の多数の先生方に求めたのである。

グループの発表の順番は、一連の体験活動が話でつながるように自分たちで決めた。音で表現する子どもは、いつになく緊張し、動きをする子どもをじっと見つめ、ならすタイミングをよく考えて音を出すように心がけていた。本番といっても、お互いが観客でもある。決まった脚本はないので、どのグループの発表も毎回いろいろアドリブが入る。だから、表現のときはもちろん、見るときも集中してお互いの表現を楽しく見合っていた。

この発表終了後、自分たちの表現を振り返る場を設定した。そこで出たのは、泥にはまりながら歩くときの音が動きの表現とうまく合っていないということだった。タイミングが合っていないという子もいれば、音色がイメージに合っていないなど出た。そこで、これを新たな表現への発展課題として、子どもたちといろいろ試してみる場を設定した。ペットボトルに水を入れたもので試してみると、ジャブジャブというのが、泥と少し合わない、砂だけのペットボトルではサラサラ鳴って、イメージに合わない。子どもたちの話し合いは、実際に動きといろいろな音を組み合わせる表現では感想を出し合うことで、活発になっていった。結局これだという音にはたどり着けなかったものの、表したい一つの音に対するみんなのこだわりは価値ある成果といえる。

#### 4. 成果と課題

##### 【成果】

今回の授業で大切にしたのは、自分で決める場である。本題材では、課題設定の場、計画を立てる場、音や劇で表現・工夫する場、ふりかえる場と、それぞれの場面ごとに自分で決める場を保証した。教師は、演出の面でいくつかのアドバイスを与えたが、それ以外は、子どもたちの力で表現活動を創り上げていった。完成したときには40人が一丸となって喜びや楽しさを味わうこともできた。自分たちが創るんだという高い活動意欲と表したい内容が自分たちの共通の自然体験であったこと、それが非常に楽しく強烈に印象に残っていることが、好影響をもたらしたものと推測する。

子どもたちが今回使用した音素材は、ひろった動くおもちゃがネジを巻いたら動き始めたときに使った「ギロ」ぐらいで、あとは身近な素材である。身の回りに存在するいろいろな音が価値あるものであることを低学年の段階に感じとることは、音楽観が広がることを意味する。今回の体験は今後の音楽づくりにおいて、音素材や楽器の特性を生かして自分で表現方法を決めて表現する際に、生きてくるものと思われる。

また、音に対するこだわりをもつ子どもが増えたことも成果として挙げられる。泥にはまる音を表現する際には、いくつかの音をみんなで聴きながら、どれが合っているかを探し出す活動をおこなったが、「この音じゃない。もっと〇〇だった。」と多くの子どもが耳に残っている自分の感じとった音と比較しながら話し合いに参加していた。これだ、という音にたどり着こうとする意欲はどの子どもからも感じる事ができた。

##### 【課題】

今回は、第1学年の実践ということで、子どもたちの音楽科での学習経験がまだ少なかった。そのため、音楽的な表現はこだわりはとて強くもてたものの、やはり少なかった。今後、学年が進めば、もっといろいろな音楽体験が豊富になる。歌のレパートリーが増え、いろいろな楽器の演奏ができるようになる。自分でふしをつくって歌ったり、楽器で演奏したりすることも知り、それらを可能にする知識や技能を身につければ、同じ「えんこう川」を音や劇で表そうという題材が、既習のアイデア次第でミュージカルのような総合表現にまで発展させることが可能である。自分の伝えたい思いがある、それを伝える方法として、歌がある、楽器がある、音楽がある、それが人々に様々な感動を与え、その感動は喜び、満足感、充実感、充足感となって自分に還元される。それこそが、「音楽って、なんてすばらしいんだろう。」という生涯にわたって音楽を愛好する心情につながっていくのではないだろうか。

総合的な学習では、自分で課題設定し追究していったことを何らかの形でまとめ、表現することが位置づいている。表現活動の中で、音楽科で身につけた力を発揮できる場は多い。この表現の場と密接に関わりをもち、音楽でしかできないものを表現していくことで音楽科の存在意義を今後も強く訴えていきたい。

(本校教諭)



##### 参考文献

- 1) 広島大学附属東雲小学校、『平成10年度研究紀要』
- 2) 広島大学附属東雲小学校、『初等教育76号』